

第1章 基本方針の策定について

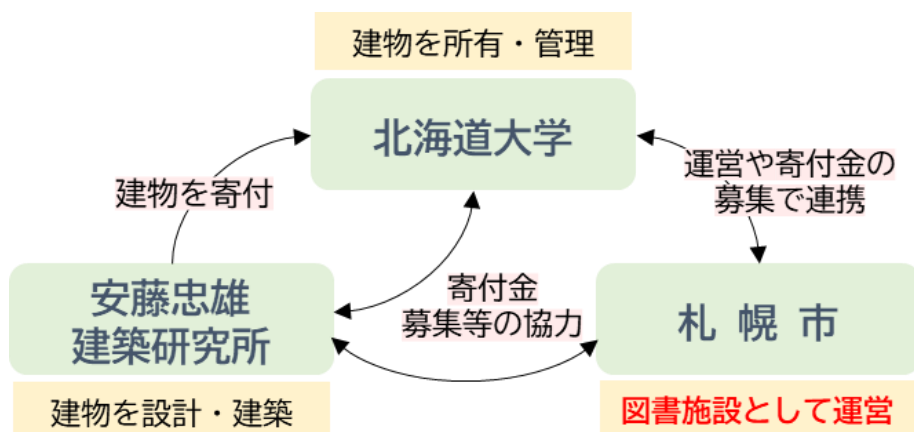
札幌市では、これまで様々な子どもの読書環境の充実に取り組んできましたが、近年は小学校から中学校にかけて不読率が大幅に増加するなど、学齢期における読書離れが課題となっているところです。

こうした状況の中、安藤忠雄氏から北海道大学に対し、子ども向け図書施設「こども本の森」を設計・建築し寄付したいとの提案がありました。

この施設は、子どもの創造力や探究心を養い、未来を担う人材の育成に寄与するものであり、学齢期の読書離れという課題の解決に資すると考えられることから、札幌市は、この施設の運営に参画することとして、令和5年11月7日、株式会社安藤忠雄建築研究所、国立大学法人北海道大学と、「(仮称)こども本の森」に係る基本合意書を締結しました。

この基本合意書では、安藤忠雄建築研究所が「(仮称)こども本の森」を設計・建築し北海道大学に寄付すること、北海道大学が建物を所有・管理すること、札幌市と北海道大学がこの施設を、子ども達が自由に本とふれあい、さまざまな分野の本を読むことにより、読書の楽しさを知り、心の豊かさ、創造力、好奇心を育み、成長の糧となる場として機能することを目的とした施設として運営していくことなどを定めています。

図1 三者の役割分担



本基本方針は上記の基本合意書に基づき、「(仮称)こども本の森」の運営に関する方向性を定めることを目的として策定するものです。

●「こども本の森」とは

「こども本の森」とは、世界的建築家の安藤忠雄氏が、「こどもたちに多様な本を手にとってもらい、無限の想像力や好奇心を育てほしい」「自発的に本の中の言葉や感情、アイデアに触れ、世界には自分と違う人や暮らしがあることを知ってほしい」という思いから、設計・建築費を自ら負担して自治体等へ寄付している子ども向けの図書施設です。

令和7年2月現在、「こども本の森 中之島」(大阪府大阪市)、「こども本の森 遠野」(岩手県遠野市)、「こども本の森 神戸」(兵庫県神戸市)、「こども本の森 熊本」(熊本県熊本市)の4施設が設置されています。令和7年7月には愛媛県松山市にも設置される予定で、本施設は全国で6施設目となります。



写真：こども本の森 中之島



写真：こども本の森 遠野



写真：こども本の森 神戸



写真：こども本の森 熊本

北海道から地球と考える。

様々な情報が簡単に得られる
スマートフォンの登場は、人々から
思索にふける時間を奪ってしま
いました。こんな時代だからこそ、
未来を担う子どもたちには幼い
ころからたくさん本を読んで、考え、
そして悩むことで人生を生き抜く力
を養ってもらいたい。「子ども本の森」で
大切な一冊と出会った子どもたちが、
かつてクラーク博士が若者たちに贈った
「Boys, be ambitious.

(青年よ、大志を抱け)」

の言葉の通り、力強く成長し、北海道
から世界へと羽ばたいてくけることを
期待しています。



安藤 忠雄

Tadao Ando

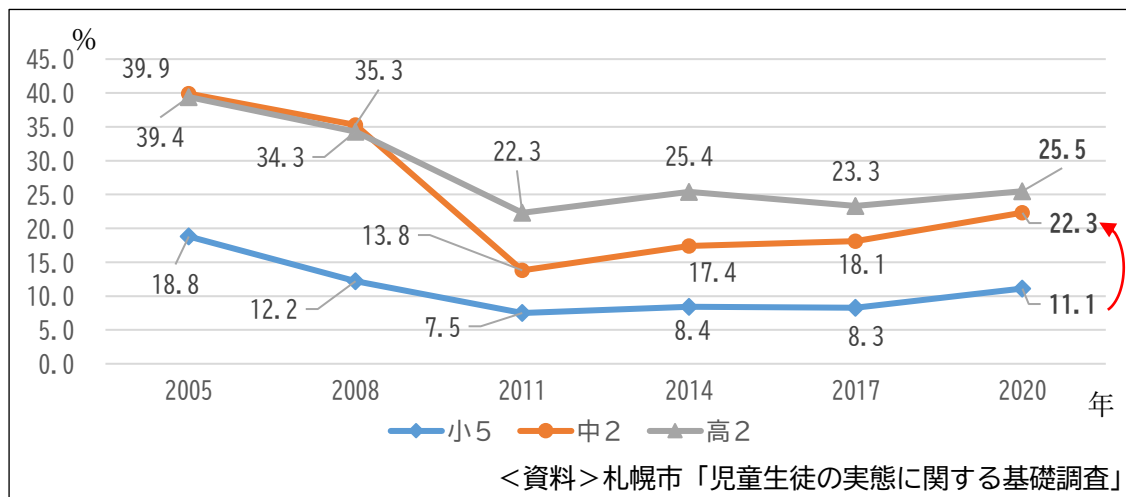
第2章 これまでの取組・課題と施設の位置付け

1 子どもの読書活動へのこれまでの取組と課題

札幌市には中央図書館をはじめとする47の図書施設があり、乳幼児期から本に親しむことを目的とした「えほん図書館」や、仕事や暮らしに関する課題解決のための情報を提供する「図書・情報館」といった、提供するサービスを特化した図書館（機能分館¹）を設置するなど、多様化する市民ニーズに応える図書館づくりを進めるとともに、中央図書館に中高生向け図書コーナー「ティーンズの森」を設置するなど、子どもの読書環境の充実に取り組んできました。

一方で、子どもの読書活動の状況としては、令和2年（2020年）の不読率²は、平成17年（2005年）と比べ、小学5年生で7.7%減、中学2年生で17.6%減、高校2年生で13.9%減と大きく改善してきているものの、教育段階が上がるにつれて読書冊数が減り、不読率が増える傾向が続いており、特に小学校から中学校にかけて不読率が大幅に増加するなど、学齢期における読書離れが課題となっています。

図2 札幌市の児童生徒の不読率の推移



加えて、近年ではデジタルメディアの急速な普及など、子どもを取り巻く情報環境が大きく変化し、これらは子どもの読書環境にも大きな影響を与えている可能性があります。

¹ 機能分館 中央図書館の基幹機能の一部を補完する、機能を特化した図書館。

² 不読率 1か月間に本を1冊も読まなかった子どもの割合。

こうした状況の中で、札幌市ではこれまでも子どもたちの自主的な読書活動ができるきっかけづくりや環境整備に努めてきたところですが、学齢期における読書離れを防ぐために、子どもたちが主体的に読書に対する興味・関心を持てるよう、自主的な読書活動の推進にこれまで以上に取り組んでいく必要があります。

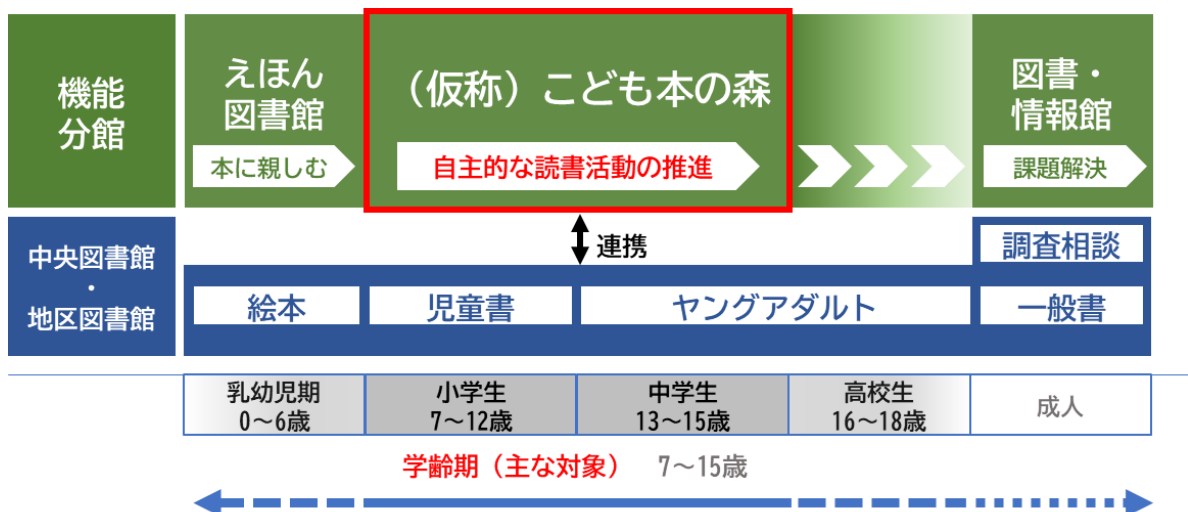
2 施設の位置付けと期待される効果

(1) 施設の位置付け

札幌市が令和2年に実施したアンケート調査³によると、本を読まなかった理由としては、小中学生では「読みたいと思う本がない」が最も高くなっています。そこで、「(仮称) こども本の森」では、読書離れが進む小中学生に対して、興味を引くテーマやジャンルの本を提供するなど、様々なジャンルの本に触れて改めて読書の楽しさに気付くきっかけを作り、読書に対する興味・関心を引き出す取組を行います。

また、こうした取組は、子どもから大人までを対象とした総合的な役割を持った既存の図書館よりも、乳幼児を主な対象とした「えほん図書館」や、働く世代を主な対象とした「図書・情報館」のように、対象を絞った機能分館が行うことで、蔵書や提供するサービスに厚みが増し高い効果が期待できるとともに、それぞれに棲み分けが図られます。

図 3 市立図書館内の本施設の位置付け



³ 読書活動についてのアンケート調査（令和2年7月）

そのため、「(仮称) こども本の森」を、これまで札幌市になかった小中学生を主な対象とした新たな市立図書館として設置し、自主的な読書活動の推進を目的とした機能分館と位置付けます。

(2) 期待される効果

本施設を入り口として、市内図書館全体の蔵書を有効活用しながら子どもたちの幅広い興味や関心に応え、継続的な学びの場を作ることが可能となります。また、子どもにとって身近な存在であり、学習活動支援などを目的とした学校図書館とも連携することで、切れ目なく効果的な読書支援を行うことが可能です。これらにより、子どもが様々な機会や場所で読書に親しむ環境を提供し、自主的に読書をする習慣を身に付けることが期待できます。

また、文部科学省の調査研究⁴によると、高校生が本を読まない理由で最も回答割合が高いのは「普段から本を読まないから」であり、本を読む習慣が身についていない生徒が多いことが示されています。このため、小中学生のうちに読書をする習慣を身に付けることは、高校生の自主的な読書活動につながることも期待できます。

さらに、北海道大学の構内に立地するという独自性を活かし、大学の有する知見や人材との連携により、学びの楽しさや奥深さを伝えるなど、図書館だけではなしえない知識や学びの広がりなどの付加価値の創造も期待されます。

これらの取組により、子どもの創造力や探究心を養い、未来を担う人材の育成に寄与することができると考えられます。

なお、これらは寄付者の安藤忠雄氏の「こどもたちに多様な本を手にとってもらい、無限の想像力や好奇心を育てほしい」「自発的に本の中の言葉や感情、アイデアに触れ、世界には自分と違う人や暮らしがあることを知ってほしい」という思いにも沿うものです。

また、北海道大学が制定した「HU VISION 2030」の基本方針「社会との共創」のビジョンに示された「豊かな人生の実現に役立つ生涯学習機能を充実させると

⁴ 高校生の読書に関する意識等調査報告書（平成 27 年 3 月）

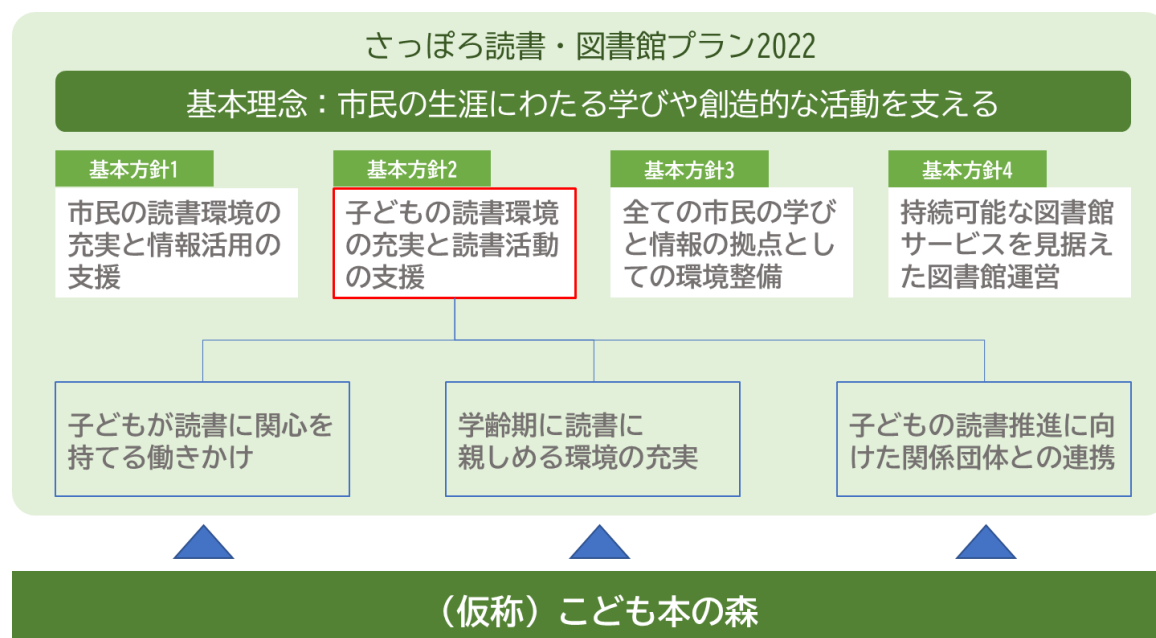
ともに、大学の社会資産を活用して、幅広い年齢層を対象とした地域交流、社会連携等に資する取組を実施し、地域と社会の活性化を推進する」に合致しており、このビジョンを具現化する取組と考えられます。

3 既存計画における位置付け

札幌市は令和4年度に「さっぽろ読書・図書館プラン2022」を策定し、基本理念を「市民の生涯にわたる学びや創造的な活動を支える」と決めました。同プランでは、平成27年に策定した「第3次子ども読書プラン」における成果と課題も踏まえて、基本理念を実現するための4つの基本方針の1つとして「子どもの読書環境の充実と読書活動の支援」を掲げています。

この基本方針に基づいて、札幌市は、あらゆる機会・場所で子どもが読書に親しむ環境をつくることや、発達段階ごとに効果的な読書支援に取り組むこととしており、本施設はこれらの取組を強化するものと位置付けます。

図4 さっぽろ読書・図書館プラン2022における本施設の位置付け



第3章 ヒアリング調査

1 実施概要

運営の方向性を定めるに当たっては、コンセプトやサービス、運営内容を具体化していく必要があります。そこで、「(仮称) こども本の森」に対するニーズや読書傾向等の把握のため、想定される施設利用者、施設関係者、先行施設、有識者にヒアリング調査を実施しました。ヒアリング対象者は以下のとおりです。

表 1：ヒアリング対象者

(1) 施設利用者	小学生、中学生、高校生、一般の方 計 19 名
(2) 施設関係者	北海道大学の関係者 10 名
	北海道大学の学生 計 21 名
(3) 先行施設	こども本の森(中之島、神戸) 館長 2 名
	こども本の森立ち上げ経験者 2 名
(4) 有識者	中島さち子氏(株式会社steAm 代表取締役)・鈴鹿剛氏(四国大学)
	北海道教育大学連携事業関係者(大日本印刷株式会社)
	山内佑輔氏(VIVISTOP NITOBE)
	有山裕美子氏(滋賀文教短期大学)
	鎌倉てらこや(全国てらこやネットワーク)

施設利用者や、北海道大学の学生からは、本施設に期待することについての率直な意見や具体的な取組のアイデアを聞くことができました。また、先行施設や有識者からは、それぞれの経験や専門、活動の背景や考え方、運営のノウハウなど、貴重な知見や助言が得られました。

2 実施結果

ヒアリングでは、対象者それぞれの立場から本施設に望むことを聞き取りましたが、類似した内容も多く見られました。本施設に求められていることや主な意見について、次のようにまとめます。各ヒアリングの実施概要、実施結果は巻末の参考資料に記載します。

「(仮称) こども本の森」に求められること

新たな興味を引き出す本と出会う

- ・自分が知らない世界、新しい視点を得られるようになると良い。
- ・ジャンルを横断的にすることで、今まで興味をもっていなかったところを知りたい。
- ・読みたい本が分からなくなる時がある。そういう人に向けて好きな本が選べる場所になると良い。
- ・本が年齢で区切られていないのが良い。

※本を手にとりたくなるきっかけとして、タイトルの面白さ、表紙のビジュアルの良さが誘発点となる様子が顕著に見られた。

本と出会うことによって成長する

- ・小さな頃から知識に触れ、成長して行き詰った時にも助けてくれることを知ってほしい。
- ・受験で視野が狭まる前に、哲学など、教養について学べる、そういう教育が図書館にあると良い。
- ・子どもがわくわく感を持てる本があると良い。大人向けや洋書でも、少し難しかったという印象を残し、大人になったときにまたその本に出会うことができる。

学び舎の中にあることで様々な文化や知識に触れられる

- ・世界を旅するように、いろんな時代や世界観にぐっと入り込めると良い。
- ・外国にルーツを持つ子どもも多い。洋書をまとめて一箇所に置かずバラバラに置けば、子ども同士が触れあい、ことばの壁を超えられる。
- ・絵本など、子どもが自分でものをつくり、誰かの手に取ってもらえる経験ができる。
- ・読み聞かせができる機械、本と音楽や映像との融合など、テクノロジーを活かして本に興味を持ってもらおうと良い。
- ・今後は分からないが、唯一の大学の中の「こども本の森」になる可能性がある。研究とともに、グローバルな様々な言語が飛び交う、その中で子どもたちが学べる空間を小さな頃に味わえる場所になってほしい。

子どもも大人も一緒に学び合う

- ・子どもたちを子ども扱いしないこと、大学院生が子どもから学ぶことも多くある。
- ・子どもたちを大人と同じパートナーとすること。短期で結果を出そうとせず、子どもとの共創は時間がかかることという覚悟を持つことが必要。
- ・子どもに対して教えるのではなくアイデアを肯定し、様々なことを一緒に楽しめるなど、大人は伴走者としての役割やメンター⁵の精神が大事。
- ・運営側も含めて、まずはやってみることが大事。失敗等のその場の偶然性を許容できるようになる。

多様な過ごし方のできる読書環境がある

- ・本のあるスペースと読むスペースが分かれているのではなく、境界を曖昧にしてほしい。
- ・靴を脱いでごろごろできるスペースが欲しい。
- ・広いところと自分の世界に没入するスペースがあると良い。
- ・おしゃべりできる、複数人で過ごせる等、多様な過ごし方ができると良い。

自然豊かな環境を活かす

- ・北大の中は自然が多いので、明るく自然光が入る広いところがあると良い。
- ・自然があるので、屋外でのイベントや読み聞かせ、中と外との連動性があると良い。
- ・自然豊かな場所で、セミやリスなどの生き物もいるので、活かせると良い。

⁵ メンター 支援者、助言者

第4章 コンセプト

第2章で整理した課題や本施設の位置づけ、第3章のヒアリング調査において得られた意見や要望を踏まえ、「(仮称) こども本の森」のコンセプトを以下のとおりとし、またコンセプトに基づく3つの方針を定めます。

「(仮称) こども本の森」のコンセプト

こどもに知をひらく

「(仮称) こども本の森」は、大学の中にある子どものための図書館として、
そこにある知を子どもたちにひらくこと、
また、本との出会いを通して知と未知の扉をひらくことで、
新たな学びと創造の世界へといざないます。

コンセプトに基づく3つの方針

本との出会いから、世界への好奇心と想像・創造力を育む

多種多様な知や人とつながり、学びを深める

魅力ある空間や豊かな自然の中で、読書に没入する

本との出会いから、世界への好奇心と想像・創造力を育む

本施設では、本を読む子どもも、普段読まない子どもも、好奇心のままに自然に本を手に取り、特別な時間と体験が得られる空間を目指します。そして、子どもが成長し、大人になってからも魅力的と思える本と出会う場ともなります。そのために年齢やジャンル、国を超えた本を収集し、様々な本との出会いのきっかけを作ります。

こうした本との出会いは、その人が見たことのない世界に触れること、興味や知識の広がり、自身の成長を促し、想像力や創造力を育むことにつながります。

多種多様な知や人とつながり、学びを深める

本施設は、北海道大学という学び舎の中にできます。歴史ある学びの場、世界的にもトップレベルで最先端の研究が行われている場において、子どもたちに、学ぶこと、研究の楽しさや奥深さに触れてもらえるよう、多種多様な知とのつながりをつくりまします。大学や附属図書館、各研究施設との連携や、子どもと大学がつながる仕組みなど、この地にできる図書館ならではの学びを創出します。

また、大学という場所には様々な知識や情報だけでなく、異なるバックグラウンドや専門分野を持つ人が集まっています。こうした人々と触れあうことそのものが、子どもたちの成長の機会にもなります。大学生や大学院生など、大人よりも子どもに近い存在である人と交流することで、子どもたちと大学生が一緒に学びを深めていくことに寄与します。

魅力ある空間や豊かな自然の中で、読書に没入する

壁一面に本のある空間が作られ、まさに本の森が体感できる魅力的な建築に加え、本施設は豊かな自然に包まれています。こうした、五感を使って感じることができる、環境や場所の力は、子どもたちの感性や想像力を豊かにします。

施設内における多様な読書空間だけでなく、屋外で自然を感じながら本に親しむことや、自然を活かした体験により、施設の中と外の連動性をつくることで、子どもたちに形式ばらない読書の楽しみを実感してもらい、次なる一冊への没入をもたらします。

これら3つの方針によりもたらされる学びや体験は、子どもたちのその後の人生において、自ら考え、正解のないものに取り組むときの手がかりとなります。

一方、学んでほしい、体験してほしいという思いから、大人から何かを一方向的に提供することは、子どもたちの自発的な学びに繋がらない可能性があるため、3つの方針におけるいずれの場面においても、子どもを子ども扱いしないことが重要となります。これを、本の選び方や見せ方、学びにつながる事業など、この図書館で起こるあらゆることに通底する考え方とします。